

【研究論文】

子どものための音楽と舞踏「Musik und Tanz für Kinder」 に見られる図形楽譜と動きに関する一考察

松 本 俊 穂

A Study on Graphic Notation and Movement Found in “Musik und Tanz für Kinder”

Toshio MATSUMOTO

はじめに

オルフ・シュールベルクによる音楽教育の実践において欠かすことのできない機関として、オーストリア・ザルツブルクのモーツァルテウムに設置されたカール・オルフ研究所がある。研究所での授業は1961年から始まり、オルフとケートマンが最初の指導にあたっている。また後に、Lotte Flach、Barbara Haselbach、Traute Schrattecker、他 Rudolf Schingerling も指導者に加わり、子どものクラスの授業も開始された。その後も、指導者は増員され、現在のオルフ・シュールベルクの先導役とも言える Wilhelm Keller、Herman Regner がそれぞれ加わることとなった。

カール・オルフ研究所のモットーとして「時代と共に変化すること、時代と共にそして時代によって変化し続けること・・・」と謳っているように、オルフ研究所の実践研究は常に斬新であり、発展し続け、世界中からその動向が注目されている。

さて、そのようなカール・オルフ研究所で行われている授業の理論書及び実践書の代表的な文献に「子どものための音楽と舞踏」Musik und Tanz für Kinder がある。¹この文献の最大の特徴はオルフ研究所の教員および卒業生がチームを組み、長年の実践を踏まえて編纂され、オルフの言う「Idee」の理念に基づき、時流に応じた活動を展開しているところにあると言ってよいであろう。

本論では、「子どものための音楽と舞踏」Musik und Tanz für Kinder で紹介されている実践アイデアの中より、オルフの音楽教育の特徴の一つである楽譜を用いないという点に着目し²、子どもたちが楽譜を用いずにアンサンブルを作り上げる過程について事例を基に

¹ 我が国においても日本オルフ音楽教育研究会において様々な実践研究がなされ、毎年「音と動きの研究」としてその実践が報告され、またそれらをまとめた「オルフ・シュールベルクの研究と実践」として朝日出版社から出版されている。

² ただし、ここで言う楽譜を用いないというのは、ト音記号や各種の音符、つまり一般的な五線譜を用いないということであり、子どもたちが図形や絵、文字などで独自の楽譜を工夫することはむしろ推奨されているということである。

オルフの「Idee」の一旦について考察していくものである。加えて、「子どものための音楽と舞踏」Musik und Tanz für Kinderの実践におけるコンセプトは常に音楽と動きを伴った活動であるということも忘れてはならない。図形楽譜において描かれる線や形、色などを様々な音の要素に読み替え、それらがどのように動きの要素につながり、音楽的基礎能力を高める活動へとつながっていくのかについて論じていくこととする。

1. 「子どものための音楽と舞踏」 Musik und Tanz für Kinder

1.1. 「子どものための音楽と舞踏」 Musik und Tanz für Kinderの対象者とその目標

ここにおける実践活動はおよそ4歳から7歳までの子どもを対象とし、2年間の活動プランが組まれている。ただしその期間は、様々な状況に対し、計画プランを深めたり、省略したりしながらでも活動できるような柔軟性のある構成になっている。加えて、その活動は家庭にも協力を求め、その指導内容も含めているところに特徴がある。

この活動における専門的な領域は次の6つの分野に区分している。

- (1) 声：歌うこと・話すこと
- (2) 基礎的な楽器の演奏
- (3) 動きと舞踏
- (4) 音楽聴取
- (5) 楽器を知る
- (6) 音楽理論の内容と経験 (Nykrin 他, 2007, p.14)

さらに、その援助の視点を「提案すること」「方向付けすること」「興味関心を育成すること」と示し、それらの活動が子どもにとって興味ある遊びや学習環境を通して、自発的かつ主体的に、また多面的、総合的に審美性を伴った活動ができるように、さまざまな呼びかけ、励ましの言葉の重要性を示しながらその活動方針を伝えている。(Nykrin 他, 2007, p.14)

以下はその活動における考慮すべき6つの視点である。

- (1) 遊びへの欲求
- (2) 想像力 (Fantasie)
- (3) 子どもの感情の世界
- (4) 知覚能力と学習への準備
- (5) 自分自身の体の感覚に対する喜び
- (6) 他の友たちや周りの環境との関わりへの願望 (Nykrin 他, 2007, p.15)

1.2. 「子どものための音楽と舞踏」教師用解説書における授業提案

「子どものための音楽と舞踏」では、教師用解説書Ⅰ・Ⅱ（1年目用・2年目用）において、実践活動における考え方と提案及び全体的な解説が示されている。いずれも構成は2部構成でなされ、1部は導入、2部では実践活動への授業提案としてまとめられている。

解説書Ⅰでは18の実践案、解説書Ⅱでは13の実践案が提示され、各テーマの最初には授業の手順・提案、そして授業で必要とする素材・教材が示されている。

指導解説書は、基礎部分と展開部分に分けて示され、それぞれに応じた実践提案が提示されている。今回は教師用解説書Ⅰを中心にその内容について考察を進めることとする。

教師用解説書Ⅰでは既述のように18の活動が示され、それぞれ深く関係し合いながら活動が進められる。加えて、本教材における音楽の学びは常に音楽と舞踏（動き）が伴って行われることがその活動の中心となっていることより、各々18の活動がどのように舞踏（動き）と関わっているかについては、以下の3つの分類に詳しく示されている。

(Nykrin 他, 2007, p.51)

(1) 「音楽的学習を組み立てるテーマ」 Themen um das aufbauende musikalischen Lernen

MG-音楽的基礎経験 Musikalische Grunderfahrung

- ・動機付けの形成・パラメーター（プログラムに関わる動作を呼び起こす為の原動力）の経験・記譜との出会い（図形楽譜と伝統的楽譜）・形式との関わり

MP-音楽実践 Musikpraxis

- ・基礎的楽器編成の導入・演奏技術・個々の表現能力・即興・創作・多声・グループによる音楽活動・基礎経験の練習と展開

IIF-楽器のインフォメーション Instrumenteninfomation

- ・後の楽器の授業の為の動機付けの形成・授業で使用しない楽器における知識の拡大
- ・簡単な楽器制作（手作り楽器）

(2) 「音楽と舞踏（動き）が特に柔軟に結び付けられたテーマ」

- ・歌、歌詞、遊び（演奏）に関する事

(3) 「舞踏（動き）に関する学習を組み立てるためのテーマ」

TG-舞踏的基礎経験 Tanzerische Grunderfahrung

- ・動機付けの形成・空間の経験・身体の意識化・形式との関わり

TP-舞踏実践 Tanzpraxis

- ・動きの技術・個々の表現力・即興・グループダンス・創作能力・動きの素材のレパートリーの育成・ステップ、ハンド形式・空間形式・基礎経験の練習と展開

さて、教師用解説書Ⅰでは以下の表1のように18の実践活動の系統性と上記の3つの分類された音楽と舞踏との関連性が示されている。(Nykrin 他, 2007, p.52)

表 1、実践活動の系統性

「音楽的学習を組み立てるテーマ」	「音楽と舞踏（動き）が特に柔軟に結び付けられたテーマ」	「舞踏（動き）に関する学習を組み立てるためのテーマ」
声と身体の響きによる音遊び MG	1、知り合う Musikater 歌	最初の動きと空間遊び TG
CD 1-8 ねこの音楽	Kazengedicht（ねこの詩）	2、動きの遊び TG、TP
3、小打楽器 MG、IIF、MP	「魔法の森」の中で	動きとかけっこ遊び TP グループダンス TP
CD 1-15 夢の音楽	4、グループで楽しむ 柔らかいクッション 歌	動き、表現する TP
パラメーターの区別 楽器と声 MG、IIF	5、音の違い 物語；多いと少ない	動きによるパラメーター TP
6、手太鼓の響きと初めての記譜 MG、IIF リズムの学びの手がかり	「そういう天気の日には」 太鼓の決まり文句	動きづくり TP
リズムの構成要素 MG リズムの学びの手がかり	7、ことばとリズム 決まり文句 Mik、mak、mulinak	CD-28 収穫の踊り
音楽の流れを認識する。 リズムをつけた動き	CD 1-29 スカーフの踊り 踊りの歌；Rundadinella	8、踊り TG、TP
声の育成 MG 聴取教育 MG リズムの学びの手がかり	9、声の響き 歌；栗の木の並木路の夜	動きあそび TP
10、音板楽器 MG、IIF、MP リズムの学びの手がかり	歌；二つのゴムボール	空間でのジャンプあそびおよび 打楽器のバチによる風船あそび （大きな、細かな動き）
図形楽譜 MG	11、音と音の通った跡 物語；橋の下で	動きあそび TG、TP
音の学びの手がかり	Tripptrapp ねずみ 歌	12、歌と踊り TG、TP
13、太鼓を打つこととリズム リズムの学びの手がかり 太鼓の伴奏 MP	歌；大きな太鼓 トントン	CD 1-29 太鼓踊り
パラメーターの区別 MG 図形楽譜 MG	14、高いそして低い 物語と歌；小こねずみさんはお散歩がしたかった。	動きあそび TG
15、音程であそぶ MG	歌；いたずら好きのカッコー	動きあそび TP
リズム- 拍節的 身体での音あそび MP 拍子の変化 MG	16、拍節と拍子 歌；昔は家をほうきで掃除していました。	色々なことができるテキストと 歌の機械 この道を見て MG、TG
17、声の創作と記譜法 MG、IIF CD 2-44 カズー 物語	カズー 歌	動きあそび TP
	18、最後に 歌；屋根の上でヤッホーダンス、樽、ダンス	踊り：ダンス、樽、ダンス TG

2. 図形楽譜及び動きを用いた実践活動

オルフの音楽教育の特徴の一つとして、できるだけ楽譜に頼らず、むしろ楽譜を使用しないで音楽活動を行う点があげられよう。楽譜に頼ることなく、自分たちの力で音楽づくりが行えることを願っての事と思われる。ただし、オルフが言う楽譜を使用しないということは、いわゆる五線譜のことであり、むしろ図形や絵、文字などで独自の楽譜を工夫する事は推奨されている。(日本オルフ音楽教育研究会、2015、p.132)

一方、オルフ・シュールペルクの内容において語らえる「決して単一の音楽を指すのではなく、動き、ダンス、言葉の総合体として形作られるものである」とするオルフの理念は早期音楽教育における音楽的基礎を経験する上でも大変重要な事と思われる。

今回の子どもの早期音楽経験における記譜との出会いが、オルフ・アプローチにおける「動き」とどのような関係の中で実践が行われているかを以下の事例を参考に考察していく。

2.1. 「子どものための音楽と舞踏Ⅰ」 Musik und Tanz für KinderⅠに見られる図形楽譜と動きに関する活動の実際

(1) 実践事例6-3/5「手太鼓の響きと初めての記譜」より「お天気あそび」／「天気図を描くー図形に表す」(Nykrin 他、2007、p.159)

■「お天気あそび」(動きに関わる活動)

部屋の中を散歩しながら、教師は言葉で天気の様子を語る。例えば次のように描写する。

・お日様が輝いている　・風が吹いている　・雷が光っている　・曇り空　・雨が降り出した　・あられが降り出した

子どもたちはそれに相応しい身振りを考え出す。

■「天気図を描くー図形に表す」(記譜に関わる活動)

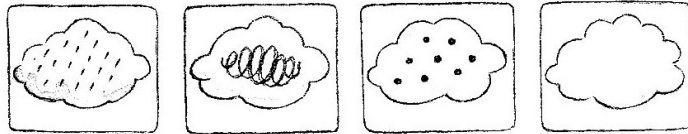
教師の問いかけ；「お天気は太鼓ではどのような響きで鳴らし、描くことができるだろうか」

教師は子どもの背中に天気モチーフを描く。子どもは感じたモチーフを紙に描く。例えば、小雨、本降り、あられ、風、等である。この遊びを何人かの子どもたちと繰り返し行う。教師は描かれた天気絵に対して観察し、コメントを述べる。

次に子どもたちは、できるだけ大きな紙(模造紙)の周りに座る。教師は太鼓で様々な天気の状態を太鼓で演奏する。それを子どもたちは描く。描かれた図に声を伴いながら表現する。

教師は準備してきた天気絵(図1)を子どもたちに見せ、今描かれた絵と比較させる。

その後、子どもたちは、教師が準備してきた天気絵を手太鼓で演奏する。



Die Wetterbilder können im Unterrichtsraum aufgehängt werden.

図 1

- (2) 実践事例11-3 / 5 「音と音の軌跡」より「訪問者」／「絵 橋の上の青い足跡」
(Nykrin 他, 2007, pp.253-254)

■「訪問者」(動きに関わる活動)

教師は部屋の中に橋としてのマットを敷く。もしくはテープで橋を描く。さて、次のように教師は語る。

「“Herr 強いぞ”、ボール、猫、ねずみが橋の上を動いています」

教師は状況が分かるように、言葉と動きの印象の違いをもって説明する。

☆私は“Herr 強いぞ” がガッチリとした足で激しく地だんだを踏んでいたのを見ました。

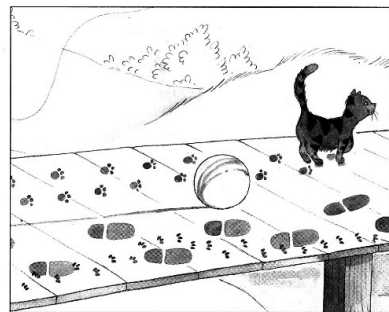
☆ねこがだれにも聞こえないように静かに足を地面につけている。

☆ねずみはごく小さな足を持っています。私たちが足の親指で乗ったら、感じることはできますか。また小さな足の手触りはどんな感じでしょう。

☆ボールが同じ間隔ではねています。簡単ではありませんが試してみましょう！

■橋の上に自分で図形を描く(記譜に関わる活動)

それぞれの響きを声によって真似をする。合わせて手で空中にその音を描いてみる。子どもたちはテーブルの上に濡らした手でペタペタと歩くように跡をつける。描かれた図形はそれに相応しいペンもしくは色のついた指で紙にもう一度描いてみる。教師は小さい橋の上に描かれた青い足跡の絵を準備し見せる。(図2) 子どもたちはそれぞれ描きそして比べてみる。



• Herr Kräftig hat Farbe aus einem Eimer verschüttet und mit ihr seine Schritte auf die Brücke gemalt.



図 2

- (3) 実践事例11-2 / 5 (Fortführung)「聴いてそして動こう」／「音の図を作曲しよう」
(Nykrin 他, 2007, p.258)

■聴いて動こう(動きに関わる活動)

時々人は見えずに音だけ聞こえる時があります。それでもそれがなんの音か分かる時があります。例えば耳だけで、私たちのお母さん、お父さん・・・と分かりますか？さて、

次の音は何の音でしょう？（CDで音を聞かせる）

①車の音 ②自転車の音 ③馬の走る音 ④足音 ⑤ボールの跳ねる音 ⑥風の音

その音を聴いて何の音か分かったら口で言わず、動きで表現してみましょう。

■音の図形を作曲しよう（記譜に関わる活動）

☆次の図形の意味を確認する。①大きな点：大きな音、②中くらいの点：中くらいの音、③小さな点：静かな音、④帯状のもの：長く音を留める。教師は大きな紙の上に、丸く描かれたものと帯状のものを置く。例えば・・・（図3）

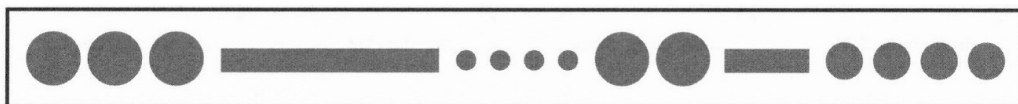


図3

描かれた図形を、体で演奏してみる（床を手で、または、楽器を使って）。いくつかのバリエーションの後に、子どもたちはその原理について理解できるようになる。

また、小さなグループを作り、それぞれ十分な音の図形（点）と音の帯の図形を受け取り、展開し、工夫し表現する。その図形を子どもたちは身体そして声に置き換えて、もしくは手太鼓で演奏してみる。

(4) 実践事例14-1／4「高いそして低い」より「動きの中の高いと低い」／「飛行機の道、歌と演奏」（Nykrin 他，2007，p.306）

■動きの中の高いと低い（動きに関わる活動）

部屋の中に例えば、障害物として机、いす、ベンチを置いておく。

☆「私の後についてきて！」と、教師は子どもたちを部屋に連れ出し、一つ提案する。

「私たちは登ったり降りたり、床を低く這ったり、ベンチをよじ登ったりします。その動きに声で音をつけてみましょう。」

また教師は楽器を使って散歩の道を示す。高い音では子どもは障害物の上をよじ登る。低い音で子どもは障害物の下を這って進む。

☆長く傾いたベンチの上を子どもが滑り降りとき、声を使いグリッサンドで表現してみる。

■飛行機の道、歌と演奏（記譜に関わる活動）

教師はできるだけ間を取って飛行機の離陸そして浮いている様子、着陸した様子を大きな紙（模造紙等）に描く。その後、指で飛行機の飛んだ跡をなぞり、合わせて声で伴表現する。（図4）引き続き、一人の子どもはそれが見えるようにその跡を線で描いてみる。それを皆で教師と一緒にその描かれた線を声で表現する。続いて飛んだ軌跡を他の色で描き、再び声で真似をする（宙返りなどはとても人気がある）。

子どもたちはそれらを事前に体験することで、確実に“次第に高くなり次第に低くなる”“高い・低い”について図形という方法を通して、置き換えることができ、象徴化

されるのである。

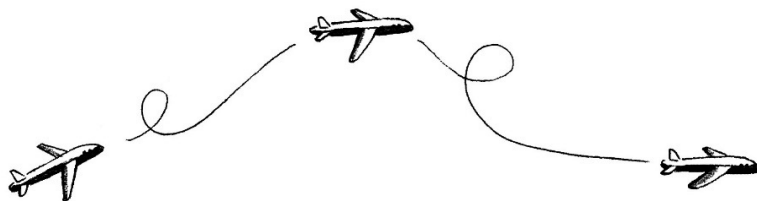


図 4

- (5) 実践事例17-1 / 5「声の創作と記譜法」より「私たちは旅にでます」／「図形楽譜」
(Nykrin 他, 2007, p.355-357)

■私たちは旅にでます（動きに関わる活動）

暖かく、日が照っています。一人の人が喜んで旅に出ます。どこに旅に出るのでしょうか。次の街、おばあさんの所？どうやって私たちはその場所に行ったらいいのでしょうか。車で？自転車、飛行機、汽車？もしかしたらバイクか馬車・・・？子どもと親の声で動きと声のまねっこを行う。おそらく親が最初に動き、声を出すでしょう。子どもが素早くそれに応え、まねっこを行う。

■図形楽譜（記譜に関わる活動）

☆図形のカード

教師は一枚ずつ図形のカードを見せる。子どもたちはその図形を音に置き換える。創作するカードは机の上に固定して置く。「どのカードを私は演奏すると思いますか」と尋ねる。教師は左から右へ歌いながら指し示す。何度か新しく構成された図形を組立て、それを唱える。指揮者も添えてみると良い。(図5)

☆自分で考え、記譜する

教師は声と同時にその跡を描く。机の上で、もしくは模造紙の上でリズムを即興的に演奏する。即興は生き生きと意外性をもって、且つ難しすぎずに行う。それによって子どもたちは、聴く事と見る事を関連付け、確実に理解することにつながる。そして同時に自らそれらの即興をやってみたいという、意欲につなげることができる。

「だれか一度ためしたい人はいますか？」

一人もしくは二人で唱え、合わせて机の上や大きな紙の上で即興を行う。各人それぞれ、紙やペンを受け取り、自らの声による即興の図形を描く。

子どもたちは図形の記譜を各人様々な形で表現

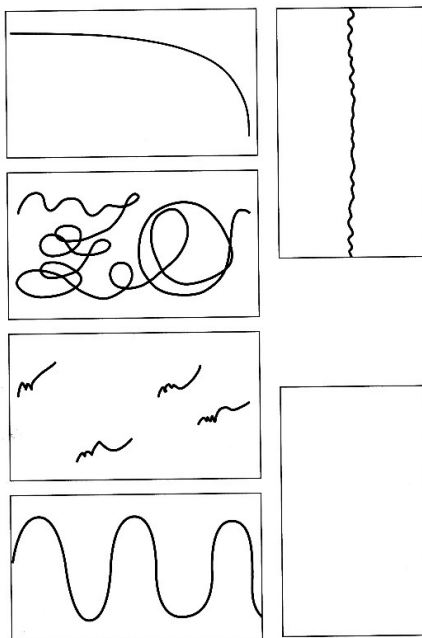


図 5

する。音の響きの捉え方は情感的であり、図形的でもある。子どもたちはそれぞれ異なる図形を描くかもしれない。教師は子どもたちそれぞれの図形の描きと他の子どもの描写を注意深く観察し、それぞれ慎重に音の響きに注意を向けるように導く。

3. 考察と今後の課題

以上カール・オルフの理念に即した子どものための音楽教育の代表的文献として「子どものための音楽と舞踏」Musik und Tanz für Kinderを取り上げ、図形楽譜の取り上げ方と動きとの関連性に注目し考察を行ってきた。

それぞれの活動はオルフの音楽教育における理念でもある「決して単一の音楽を指すのではなく、動き、ダンス、言葉の総合的なものとして形づくられるもの」とあるように、それぞれの活動は常に「動き」とそれを誘発する「言葉」によって展開され、その過程の中で効果的に図形楽譜が扱われていた。

「子どものための音楽と舞踏Ⅰ」Musik und Tanz für KinderⅠで取り上げるテーマは18である。それらのテーマは順を追った学びの系統性を持ち、音楽と舞踏（動き）を常に繰り返しながら音楽的基礎形成を養い、その道筋は「音楽的学習を組み立てるテーマ」・「音楽と舞踏（動き）が特に柔軟に結び付けられたテーマ」・「舞踏（動き）に関する学習を組み立てるためのテーマ」の3つに設定され、循環しながら音楽的基礎を深めていけるように組み立てられていた。

その中で今回注目した記譜法に関して具体的に示された箇所は4箇所であった。³ その記譜法に関する内容は全て「音楽的学習を組み立てるテーマ」として設置され、MG-Musikalische Grunderfahrung（音楽的基礎経験）もしくはIIF-Instrumenten-informationとその具体的目的が示されてあった。

ともすると、図形楽譜を取り上げる場合、記譜する事のみ活動が集中しがちであるが、この実践を考えていく上でも、オルフのアプローチを知る上でもこの実践アイデア集は大変示唆に富むものであったと言える。

今回は「子どものための音楽と舞踏Ⅰ」Musik und Tanz für KinderⅠの数あるテーマの中で記譜法に注目し考察を行ってきた。次回は幼児の音楽活動全般において特に課題とされている歌唱活動に関する実践に注目し、引き続き「子どものための音楽と舞踏Ⅰ」Musik und Tanz für KinderⅠの考察を試みたい。

³ 6、手太鼓の響きと初めての記譜 11、音と音の跡 14、高いそして低い 17、声の創作と記譜法の4箇所である。

参考・引用文献

- Nykrin,R./Gruner,M/Widmer,M (2007)「Musik und Tanz für Kinder, Unterrichtswerk zur Früherziehung I」Schott
- 石田陽子 (2014)「色彩や形に響きを聴く～図形楽譜を用いた音楽表現活動の試み～」
四天王寺大学紀要57, pp.257-268
- 芹澤美奈子 (1999)「わが国におけるオルフ・シュールベルクの展開～日本オルフ音楽教育研究会の活動に焦点をあてて」浜松短期大学研究論集 (55), pp.139-160,
- 永岡和香子 (2009)「早期教育授業実践モデル集 子どものための音楽と舞踏 Musik und Tanz für Kinder についての一考察」日本女子大学人間生活学研究科
- 永岡和香子 (2011)「幼児の総合的表現活動の展開の可能性～子どものための音楽と舞踏 Musik und Tanz für Kinder の分析を通して～」全国音楽教育学会 第22号
- 永岡和香子 (2013)「幼児の主体的・総合的な表現活動の実践～5歳児クラスの実践事例の分析を通して」全国音楽教育学会 第24号
- 中地雅之 (2000)「オルフ・アプローチの受容と実践的展開における問題と可能性～日・独音楽教育の縦断・横断的比較研究～」『音楽教育額研究 I』音楽之友社、pp.307-321
- 登 啓子 (2012)「子どもの音楽表現活動における動きの可能性～音楽・動き・言葉の融合された養育の検討～」帝京大学文学部養育学科紀要37 pp.43-52
- 日本オルフ音楽教育研究会 (2015)「オルフ・シュールベルクの研究と実践」朝日出版社
- 山本祐子 (2017)「音楽鑑賞活動の展開についての一考察～図形楽譜づくりにおける子どもの変容に着目して～」東海学院大学研究年報2, pp.139-147